

「なぜ、歯科健診を受ける成人が増えたのか」—結果期待感を高めるナラティブな取り組み—

○吉田弥代^{1,2)}, 松田人恵²⁾, 田村達二郎^{1,2)}, 赤井綾美¹⁾, 福原 稔¹⁾, 福原早紀¹⁾, 大橋正和¹⁾, 文元基宝^{1,2)}

¹⁾関西ウェルビーイングクラブ, ²⁾文元歯科医院

(索引用語：行動変容理論, ナラティブ, 半構造化インタビュー)

口腔衛生会誌 56 (4), 2006

目的：

H13年に発表された佐々木の「なぜ、歯科健診を受ける成人が少ないのか」¹⁾の報告によると、行動変容の理論である「セルフエフィカシー理論」のネガティブな結果期待感やヘルスビリーフモデルから、仮説として、一般に成人が歯科健診を受診するという事は健診後の治療に伴う社会的負担感や情緒的負担感を連想させる一方でそれらを上回る歯科健診のポジティブな結果期待感を感じられない事、またはポジティブな結果期待感の欠如が示唆された。そのことから我々は、来院者の結果期待感を把握する必要性を感じ、平成15年1月より「院内オリエンテーション（以下院内オリ、詳細を表1に示す）」を実施した。この取り組みによる来院者の結果期待の分析と、健診受診者数との関連性を調査した。

対象及び方法：

H15年～17年まで計425名の19歳以上の有歯顎者を対象とした。分析者3名が院内オリ時のインタビュー記録用紙から結果期待感と思われる文字データを抽出し、「切片化」した。それを、佐々木¹⁾が先の論文で発表したコンセプト・カテゴリ項目に振り分け、量的な比率を出し分析した。また、H12～17年の月平均健診受診者数の変化を分析した。

結果及び考察：

1. 結果期待感 全部で705のフラグメントが抽出された。それらを分析していったところ、最終的な結果期待感として、1)「治療における負担感」2)「歯科受診における負担感の軽減」3)「QOL(目指す姿)」4)「早期の対応による苦痛や疾病リスクの回避」の4項目のカテゴリが抽出され、各々のフラグメント数は1) 192 2) 151 3) 288 4) 74であった(関係図を図1に示す)。カテゴリ2)～4)のポジティブな結果期待感全体の72.8%で、1)のネガティブなものを上回った。

以上の結果から、筆者らの調査対象者は歯科医院に受診している「患者」であるので、佐々木の指摘どおり、受診前には結果期待感をネガティブに捉えていると推察されたが、院内オリによる医療者との交流によって、潜在していたニーズに気づいたり、表面化し受診行動の結果期待感やメリット感が高まったことが示唆された。合わせて受診に伴う負担感も

緩和され、継続受診により影響を与えたものと考えている。

2. 健診受診者 平成12年～18年のレセプトにおける定期受診者の割合(図2に示す)は、年々増加している。この結果のみで筆者らの取り組みと健診受診者増加との因果関係を実証できるわけではないが、関連性を示唆するデータのひとつであると解釈している。院内オリで対話の時間を取って各患者と向き合い、結果期待感を明確にすることで、その後の「治療・予防プログラム」に患者の意向を反映することができ、患者の予防処置を含めた定期的受診行動へと結びつきやすくなることが推察された。

参考文献：

- 1) 佐々木健：なぜ、歯科健診を受ける成人が少ないのか、ヘルスサイエンス・ヘルスケア, Volume 1, No.1: 23-26, 2001

表1 院内オリエンテーション

目的 当院の考えやシステム(医療者の価値観)と患者の価値観をすり合わせる為に設けた対話の時間。

内容 ・患者が自由にナラティブを語るように、別室(研修ルーム)で約30分の時間で行う。
・患者の心理・社会的背景を視野に入れて、半構造化されたインタビューにより結果期待、保健行動、感情を共有する。

流れ ・アイスブレイク(場の雰囲気や和らげる)

・半構造化されたインタビュー法 ～ 現在・過去・未来 ～

- 自己紹介・来院された理由
- 過去現在の困りごと
- 将来どうなっているか(感情も含めて)
- 将来どうなりたいか(結果期待)
- 現在の保健行動
- これからの治療や予防への結果期待
- 文元歯科医院のシステム紹介

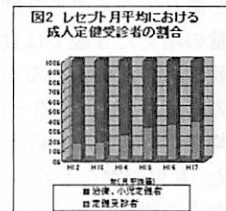


図1 保健行動の効果・それに伴う負担や困難さに関する認識

